

槐

かい

岡井省二創刊

平成19年5月号

平成十九年五月一日発行 第十七巻第五号 通巻第一九一号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



持
続

高橋将夫

よく上る風は自ら風を呼び
鶏合はやれば空を切るばかり
先を行く煙を追うて野火走る
吹かれきし苗札もとの場所はどこ

のどかさにある一抹の不安かな
もう少しふくらみたさう石鹼玉
期待するほどには飛ばず石鹼玉
涙なく過ぎし五年やつくしんぼ
海髪ほどの心の乱れなかりけり
春の風目指すところのありにけり
持続とは寄せては返す春の波

掛 袋

宇田喜美栄

元日や父の青墨滲みける
遠祖とおおやの山野に佇てり仏の座
ぼつぺんや浅間嶺の空真青なり
種袋振るや日脚の伸びを言ふ
海照つて笹鳴き続く日なりけり
走り井のきらきらと明け猫柳
番来て小枝の雪を零しけり
記念樹や集ひの締は小豆粥
しばらくは水盤に置く露の臺
ほどほどの息災をいひ桑の花

特別作品

春 昼 の 一 輛 電 車 通 り 過 ぐ
雲 間 より 母 の 顔 見 ゆ 桃 の 花
流 木 の 中 州 に 春 の 波 洗 ふ
仰 ぎ み し 帰 雁 の 空 の 茜 い ろ
パ ン の 耳 切 つ て を り け り 鳥 雲 に
月 朧 水 お ぼ ろ な り 櫂 の 音
鋏 提 げ て あ ま 草 の 道 歩 き け り
カ リ ヨ ン の 歌 届 き け り 袋 掛
花 び ら の 舞 ひ こ む 厨 な り し か な
御^み 鹿^か の 湯 の 小 糠 雨 な り 緑 さ す

槐安集

市場基巳

朝の間のひだるく山の葱畑
墳山に寒木立ちて空揺らす
枯芦の葉ずれ間近の通し鶴
ほろ酔ひて山の椿を見に行かな
鶏に声かけられて葱を引く

水野恒彦

流寓のこゑしきりなり鳥雲に
雛の顔いよいよ山に近くあり
桐の幹直立にして二月過ぐ
女身佛の眼の端にゐて青き踏む
朧夜の金銀箔を惜しみなく

延広禎一



春眠や人間の影河馬の影
種袋を透かすや受胎告知絵図
大亀の背^ナに立ちたる海市かな
指先に鬢^{ひしお}の香涅槃西風
命綱を操る空師鳥交る

空師は大木を切る職人

加藤みき

冴返る雲一つなき夜空かな
一筋のあかりの中の葱坊主
つちふるや砂に大弧の波のあと
櫻花いくつも電車やりすごす
一頭の初蝶よぎる白さかな

石脇みはる

かおかたち如何ともせむ彼岸河豚
風光る熊野古道を抜けにけり
あつあつのマカロニグラタン二月かな
いかなごの漁りの網をこぼれけり
春泥やでんぐり返へる赤みみず

竹内悦子

橋弁慶謡ふ媪や鬼は外
砂蒸しに五体よ寒の月と星
遺句集の数多子雀親雀
和紙の上に金平糖や燕来る
陰陽師あぶり餅食す二月かな

中島陽華

バレンタインデー天日塩のおまけつき
寒の月迦楼羅まとひし不動かな
柁を挿して二軒の餅屋かな
重寶なマフラーとなり歩き出す
目の隈のとれてをりけり春の星

栗栖恵通子

勾玉の穴より寒の戻りかな
草薙剣吐きたる日の永き
初蝶や追葬塚に骨かさね
斑鳩の豊の裏の猫の恋
慈の色に沖ありにける流し雛

大島翠木

西方へ三尺沈む海鼠かな
観音の臍さへづりの中にな
雨は嫌ひと土筆つんつん兵馬桶
切支丹黒猫恋をしにゆけり
抱合の神満月のさくらかな

黒田咲子

はるをよぶ雪とおもへばくちびるに
鶉のひいよひいよと寒の明
春や立つ馴染みの鯉のゐるにはゐる
野の梅や日ざしは雲にさへぎられ
外厨ある住まひかな椿落つ

雨村敏子

赤ん坊の指の力や薺咲く
桃の花杏の花や観世音
貝寄する風父ははのこゑ聞こゆ
空のいろやはらかなりし常楽会
大寒の道具屋筋に鐘の音

小形さとる

麦の芽や十年ばかり会はずをる
五斗米に腰が折れたか山笑ふ
亀鳴くや良寛を生み芭蕉生み
即身や蛤は舌出し尽くし
何ひとつ見てをらなんだ芽柳も

えんじゅさろんから

中島陽華

本多 俊子

春の野にまんまるの穴省二亡し
蜃気楼生はいとしくありにけり
紅梅に星なき夜も藜ひろぐ
赤星の近づく浮かれ猫の耳
田螺鳴く萱葺門の裏手かな

天野きく江

白きもの椿と決めし巨船かな
踏青や誰にもありし出発点
陽光の笑壺なりおおいぬふぐり
とある距離鏡に入れて春の雲
鼓草母三十二才の羽織かな

今回のえんじゅさろん『古池に蛙は飛びこんだか』もほぼ中程にさしかかり、この際一息入れようということになり午前に輪読、午後は親睦会ということになった。

第五章「ゆかしきは『おくのほそ道』、「ゆかしい」とは、もとは「行かしい」行つてみたいという意味。芭蕉はなぜ、みちのくへ旅立ったのか、そしてなぜ『奥のほそ道』が書かれたかについて輪読した。いろいろの説がある中でつまるところ、みちのくは歌枕の宝庫であったからであり、芭蕉の半年にわたる紀行文を通じ紀行文全体を心の世界へと昇華させようとして、三年前の貞享三年の春の日に突然心に浮んだ古池の幻が姿を変えたものだったということでの章を終る。

さろん終了後早速昼食となった。弁当はデパチカで金に糸目をつけた豪華松花堂もどき、歓談のあと、三人一組で競う「七つの間違いさがし」に挑戦、各自の家庭から持参した賞品を獲得した。

つづいて竹中一花さんより京、五條天神社のお話があり私がそれに関連して謡曲「橋弁慶」の一節を披露させていただいた。また中島陽華さんは前日歌い過ぎたとかで横隔膜を押さえつつの熱唱であった。

この日のトリは将夫主宰であった。事前にうかがったとき「えっ」とおどろいた。多分？秋の全国大会で披露されるであろうからここでは伏せておくことにする。

かくして「ふるさと」ほかを一同で合唱し一本締めのおひらきとなった。

槐市集

秋岡朝子

命名の墨色匂ふ春の雨
春風や赤子のごとく犬抱いて
博多帯のしなやかさも春の宵
春泥や靴をどれほど洗つたやら
女三人パンジーのごと育ててくれし

犬塚芳子

芽柳に夕日の風のやはらげる
金縷梅や大手を振つて男ゆく
犬ふぐり空その色に揺れやまず
夫の忌や青鰻にまず箸をつけ
たましいへ沁みいる春のとろろ汁

岩下芳子

石段をナンバ歩きに梅見かな
薄氷のはなれては寄る祓川
春立つや公会堂のフラダンス
二面石の一つの貌の陽炎へり
湖にさくらの色のありにけり

岩月優美子

象の背にタイヤの乗りし実朝忌
木曾馬の面春草の中にかな
吹越や弁天の頬赤らみて
山肌そはだに湿りまだあり二月尽
菜の花やそはだ敲たたててをりラマの耳



槐集

高橋将夫選

若狭から届きし魚と春の雪 京都

竹中 一花

うす紅の春の玉子を貰ひけり
陽炎の中にありけり扇塚

陽炎やゴツホの影の確かなり 岡崎
薄氷の上に真白き羽毛かな
しばらくは孔雀の形春の雲

岩月優美子

春の影曳いてまんぼう近づきし
娛しめば 京みやぎの空に春の色

生野菜ばりばりと食す涅槃の日
かたかごの花に地の神憩ひたる

近藤きくえ

近藤 喜子

梅の香を残し人ごゑ遠のきぬ
枚方

少年のじつと見てゐる春の水
白梅やびしりと朝の気の残る

鳶の輪をさらつてゆきし春疾風

鏡ありし部屋ひろくなる春の情

天地にきほひありける雨水かな

茅花野や動くものみな光りをる

もろもろの動き初めたる春の闇

菜の花や常に笑みゐる翁面

中野 京子

谷村 幸子

靄ごめの風の手のひら春立てり

春光や樟葉の宮の森深し 枚方
徒然にいでし桐畠露の臺

セピア色の林の真昼春の鹿

そこらじゆう梅の香のして歓喜天

風よりも軽き言の葉冴返る

心字池こころに舞うて入りけり春の雪

たんぽぽの絮に西風東風
啓蟄のあけつばなしの空と海

はこべらを褥としたり猫眠る

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

春の影曳いてまんぼう近づきし 竹中 一花
まんぼうがゆつくりと近づいてくる。その影を春の影ととらえた感性に共鳴する。近づいてくるあの茫洋とした姿は確かに春の到来を思わせる。

枸橘の棘つつみぬる春日かな 近藤きくえ
カラタチに春の日差しが注いでいる。そのやわらかな日差しはまるで棘を包み込んでいるように見える。のどかな春の実景であり、かつおだやかな精神の風景。

啓蟄の明けつばなしの空と海 中野 京子
春になり虫があちこちから顔を出す啓蟄の候。顔を出した虫たちには、空と海がきつと開けつばなしにされた広い世界に見えたことだろう。
冬から身も心も開放された作者の晴れ晴れとした精神の風景にほかならない。

かたかごの花に地の神憩ひたる 岩月優美子
かたかごの花は片栗の花。早春に莖の先に紅紫色の花を咲かせる。下向きに咲く姿はなんともしおらしい。そのかたかごの花がたくさん咲く地に神々の憩う姿を見る作者の精神の風景に共鳴する。

茅花野や動くものみな光りをる 近藤 喜子
理屈を言えば、動かないでも光るものもあり、動くものでも光らないものもある。しかし、風にそよぐ茅花やさざ波や梢の鳥や心の動きに春の胎動を感じ、光を見たところは、まさに精神の風景。

はこべらを褥としたり猫眠る 谷村 幸子
眠る猫も左甚五郎作ともなると芸術。しかし、はこべらを褥にして眠る猫もかわいくてよい。思わず自分もその場にねころんでみたくなるのも、もつともだと思ふ。

初蝶の生れてきたる梵字岩 植木 戴子
岩のような硬いものから初蝶が生まれたという感覚がユニーク。なるほど、確かに梵字のひらひらした感じは蝶を思わせ、そこから蝶が生まれたとする情景把握には納得させられるものがある。

漂へる鷗が音譜 東風の海 久保東海司
東風に吹かれて波間に漂うたくさんの鷗。それがまるで音譜のようだという。音譜がかなでる風の音楽が今にも聞えてくるようだ。東風だからきつとやわらかな曲なのだろう。

涅槃西風声に明暗ありにけり 近藤 公子
声には強弱、高低があるように、明暗が有るという。そういえば、声には裏表もあるし、明るい声、暗い声もある。
吹いているのが涅槃西風だからかもしれない。ひよつとしたら、かの世からの声かもしれない。

(以下略)